

す。運動資金作りのための古本バザー、図書館への働きかけ、市への陳情、その間をぬってより良い図書館を作ってもらおうと自分たちの勉強のための図書館見学、図書館員を招いて「図書館の発見」をテキストにした読書会等とさかんなエネルギーはどこから出て来るのでしょうか。

横浜文庫の会や田園都市線沿線の文庫との共賛で行った、いぬいとみこさんの講演会、親子読書研究会への参加、タウン誌のコラム「私の本箱」の担当も、新聞発刊以来、月二回ずつ続いています。そのコラムにのった、八木重吉の詩が好きだという人が集まって話す機会を持ったのも、大きな広がりの中のひとつだと思います。

## 図書館開館で一つの節に

順調に育ってきた文庫も八年目を迎えて、一つの節にきたようです。図書館を作る会の運動が実り、あざみ野駅前に市立山内図書館ができることになり、四月に開館が決まりました。その図書館のサーヴィスエリア内に入るはずみ文庫と、となりにある郵政宿舎へくる配本車「はまかぜ」の配本が、野毛の図書館の方で問題になり、「はまかぜ」は打切りの方向で考えはじめられています。

郵政の子供たちをいずみ文庫で受入れてほしいという話が郵政の方から出てい

ます。手つだいの人数、本の数、ロビーの広さなどを考えるど無理だろうという意見、今のいずみ文庫は大きくなりすぎたので、本来の家庭文庫に戻して、暖かい雰囲気のある文庫にしたいという意見、沢山の意見が出て、早く解決しなければならぬ大きな問題です。新しくできた図書館で子供のための行事が沢山行われるなら、今までの仕事のやり方も、もう一度考え直す必要があります。

一月末に図書館長を招いてお話しをする機会がありました。図書館の方は、まず動きだしてからでないといえないうえ、ないと大分あいまいです。

## 福祉活動

### 文庫活動の中から連帯へ

八年前、私たちの子どもたちが、小学校一年生に入學し、その学級懇談の中で、テレビにかじりついている子どもたちをどうしたらよいか、と話し合った結果、子どもたちに、ダメとひとこと言うよりも、スポーツの出来る広場を獲得したり、良い本を身近においてあげたいと言う、ささやかな願いを持ちました。初めは四、五人のお母さんの協力と、三十冊の持ちよりの本を、りんご箱につめ、

現在私達が望んでいるのは、山内図書館から配本を受けたいということです。

B館なので配本車はつきませんというところではなく、専用の車がないならば、他の部門の車をあいているときに利用するというような、住民本位の考えをしてほしいということです。遠い野毛の図書館からでなく、近くの図書館から配本してほしいと熱望します。

文庫としては、四月から蔵書と人名台帳をカード式にしようと考え準備を進めています。一つの事が決まらないうえの段階へ進めないといえないうえを感じているこの頃です。

### キビタスの会 簡 照子

二週間毎に廻す巡回文庫が生まれました。近くに図書館がないと言う状況からほとんど会員が増え、私たちの手に負えないと、市へ図書館設置の陳情をいたしました。しかし、すぐに建設できるものではありません。図書館ができるまで私たちでささえようと、気を取り直し頑張ることにしました。

本が足りないバザーをやる。子供が多く集まる秋にはハイキング、夏はキャンプと、必要に迫られた発展の中で、方針を間違っはいけない、また、

子供たちに負けないように勉強をしましょうと、母親クラブ、婦人学級、児童文化講座と取り組み、婦人学級で学んだ、伝統の手づくりのおもちゃを児童文化講座でお母さんが教える、また、子どもといっしょに教わった人形劇（人形づくりから上演まで）は、いまではバザーのアトラクションとして、毎年小学校四、五年生によって受け継がれ、上演されています。

当時一年生だった子がいまでは中学二年生、もうバザーもほとんどその子たちが中心になって開かれ、いまでは地域のたのしみの恒例の行事として、十一月三日のくるのが待たれています。

会員と地域の人々のふれ合いのなかで、自分たちのために一生懸命してきたことなのに、地域の人々が暖かい目で眺め、あらゆる協力をして下さり、すばらしい仲間づくりができたことを感謝の気持ちでかみしめたのでした。

六世帯にふくれ上った文庫の仲間の中で、ダウン症、自閉症、智恵遅れの子どもたちにめぐり合い、＃どの子にも幸せを＃の願いが福祉について学ぶ姿勢をもちました。

この時点で、鶴見区内にはいろいろのグループが地域で活躍していることを知り、一度皆さんで集って情報交換などをし、いっしょに学べるものはいっしょ

## キビタスの会活動の記録

50. 11. 21

婦人教養セミナーの講座が終って福祉のことを考え行動しようと提案があった。有志20名会員として申入れがあった。

50. 11. 28 勤労青少年センター  
準備委員会 会の設立方向づけ

51. 1. 21 勤労青少年センター  
鶴見の福祉を考える集い  
会の名称について

51. 1. 29 勤労青少年センター  
福祉事務所ではどのような仕事を。  
鶴見福祉事務所長、係長さんを囲んで会員の役割をきめる。

51. 2. 6 勤労青少年センター  
肢体不自由児父母の会との話し合い

51. 2. 27 新誠教会  
肢体不自由児の機能訓練会へ参加

51. 2. 27 花月園子どもセンター  
心身障害児自由訓練会「ひよこ会」  
へ参加 同会の母の会との話し合い

51. 3. 12 (雨のため)平和島温泉へ  
ひよこ会遠足へ参加

51. 3. 17 勤労青少年センター  
準備委員会 会の発足及び方法

51. 3. 29 簡宅  
準備委員会

51. 4. 2 鶴見会館ホール  
発会式 福祉を考える映画の集い  
善意の箱 36,793円鶴見区福祉協議  
会へ寄託

51. 4. 14 簡宅  
例会・話し合い 発会式の反省  
私達は福祉をこう考える／人と人との  
かかわり合い／現実的に行動する

には／行政に望むこと

51. 4. 21 簡宅

打ち合せ会  
T. V. K. ご意見有用について

51. 4. 28 T. V. K.  
T. V. K. テレビ録画どり

51. 5. 6 勤労青少年センター  
例会 会員の募集／今後の課題

51. 6. 4. 5 相鉄ジョイナス4階  
広場県善意銀行の要請に依る象の花  
子の愛の車椅子募金に協力  
102,178円善銀へ寄託

51. 6. 8. 9 県社会福祉会館  
(県社会・福祉協議会の要請) 保育  
ボランティア

51. 6. 27 NHK  
神奈川福祉の街をつくる会の要請で  
NHK放送センター見学会へ参加

51. 6. 30  
例会 NHK見学会の報告その他

51. 7. 28 例会  
夏のこどもフェスティバル参加・肢  
体不自由児夏休み一泊旅行・老人給  
食について

51. 8. 19. 20 横浜公園  
心身障害児自由訓練会、なづな会、  
さつき会、ひよこ会と手をたずさえて、  
光の家設営バザー協力。益金を  
上記の会へ寄託

51. 8. 25 例会 フェスティバルの  
反省／老人給食と愛の一声運動につ  
いて／旭くるみ学園へ奉仕と老人の  
しあわせを語りあう会(市社協)参加  
について

51. 8. 30. 9. 1  
身障児センターの親子箱根大文字荘

旅行に協力

マイクロバスの奉仕者発見と資金援助

51. 9. 18 鶴見区

詩と歌曲のサロン

51. 9. 30

老人給食について川崎愛泉ホーム見  
学

51. 10. 9 港北区

詩と歌曲のサロン

51. 10. 29 簡宅 例会

51. 11. 1 県庁

ともしび運動の一つとして身障者雇  
用促進のアンケート調査発送作業の  
参加

51. 11. 10 簡宅 打ち合せ会

エンゼル会運営資金援助について  
ひよこ会定員増のため市場地区に自  
主訓練会エンゼル会発足

51. 11. 24 勤労青少センター 例会  
文化活動と福祉の理念の普及につ  
いて／ベルギーよりピアニスト来日。  
コンサート開催について(他都市は  
行政が実施する)

51. 12. 22 簡宅 例会

エンゼル会について／ピアノコンサ  
ートについて／布の本／高齢者の精  
神障害のガイドブックによる勉強会  
(新福尚武著)／52年度の年内計画  
の前半期について

51. 12. 25 教文センターホール  
パトリック・クロムランク夫妻ピア  
ノコンコンサート 入場者 349名  
3万円を市社協を通じて在宅身障者  
協会へ

## 学びの中から福祉活動へ

に話し合いをしました。そのとき、市に教養セミナー講座があることを知り、五十年タミナル学習の場を鶴見に開こうと、このことをきっかけに各グループから代表が集まり、運営委員となりました。

鶴見は東口(海側)、西口(山側)と分けたほうが交通の便宜上よいと判断で、西口「人と社会」、東口「教育と福祉」というそれぞれの柱で、各四回の講座を持ちました。そして受講された方々の中から、福祉を見直し、考え、学び、行動する会としてキビタスの会が生まれました。

キビタスの会、どなたもこの会の名前を聞かれたとき、どう言う意味ですか？とお聞きになります。語意はラテン語で(CIVITAS)、市民権・市民(市民のコミュニティ)・文明・都市です。私たちは一人一人がいま、自分のおかれている立場において自覚を持った市民として生きる、その市民が家庭を、地域を、都市を作り上げていくと言う意味にとらえ、自分をしっかり大事に生きること、すなわち隣人を大事にすることと生きています。私達がいろいろのボランティア活動を長年してきて、肌で感じ、学んできた結果、「キビタス」それが私たちの生き

ていく基本的な姿勢なのではないかと気付いたのです。まず会の基本的な考え方を――

一、鶴見区の(住んでいる所の)福祉の実態を知る

二、学ぶ姿勢をつねに持つ

三、思想、宗教、政治にかかわりなく、人間として考える

四、ささやかなりとも力を寄せ合っていく

五、暖かい心のひろがり求めていたしました。

また、初年度の事業目標として――

一、福祉の理念の普及

二、一人ぐらしの寝たきり老人(愛の

一声運動)

三、心身障害児自主訓練会へ保育の手

伝い

四、会員の学習会、話し合いの会

五、要請に基づく行事の手伝い

六、その他目的達成のための事業

の六項目をきめました。

そして会の発足を五十一年四月二日と  
きめ、"福祉を考える映画の集い"を鶴  
見会館ホールでいたしました。当日は九  
四六名の入場がありました。当日は九  
ました。いま、私たちは子供の遊びで  
"この指とまれ"というのがありますが  
あのように、障害児のために、老人のた  
めに、福祉の理念の普及に、それぞれの

特技と自分の目的に合せた、分会で自分  
のできることを無理をしないで細く長く  
続けたいと思っています。別紙の記録の  
中で"詩と歌曲のサロン"、"ピアノコン  
サート"等は、私たちが福祉を、一人一  
人がどんなにささやかでも、幸せを感じ  
て生きると言う意味に捉え、つらいとき、  
悲しいときに、美しい音楽が、美しい詩  
がしばし心に安らぎをあたえてくれます  
ことを大勢の人々に知ってもらい、福祉  
の心をひろめるために開催いたしました。

また、老人給食も始めるべく調査、研  
究に励んでいます。視覚障害のあるお子  
さんに、少しでも夢をと布の絵本(手で  
さわってみる本)を神奈川具視覚障害児  
者を持つ親の会、よこはま文庫の会、キ  
ピタスの会がいっしょになって作ろうと  
しています。おかげさまで地域の方々が  
材料や専門的な技術を提供してくださっ  
ています。

振り返ってみますと、横浜詩人会、レ  
オちゃんクラブ(鶴見区在住の二十才の  
青年男女の奉仕の会)、ロータリークラ  
ブ、ライオンズクラブその他大勢の方々  
の善意の協力が私たちのボランティア活  
動をささえ、今日まで一つ一つの奉仕活  
動がみのってきたのだと思います。

## 行政に望むこと

私たちがボランティア活動を始めた頃  
は、世の中も行政も市民の自主的な活動  
を思想的に危険視されていたのが、いま  
では福祉を大きく捉え、良い方向に進み  
つつある。けれど末端の市民と向き合う  
窓口の区等では、まだ行政主導型で生れ

## 自主幼児教育

自分たちの子供を自分たちで集団で育  
てようという活動は、幼稚園年齢児を対  
象にしたものはそれほど多くはない。こ  
のいわば"自主幼稚園"とでもいうべき  
数少ない活動例として、次に紹介する「ひ  
まわり幼児教室」のほかに、戸塚区ドリ  
ームハイツの「すぎの子会」が知られて  
いる。

マスプロ化した幼稚園教育に疑問をも  
った親たちが自分たちで幼児教育をし  
てみようとして五十年四月に始めたこの会は、  
発足当初から注目を集めた(本市発行の  
"市民グラフヨコハマ"14号でもとりあ  
げている)。団地の近くの土地を借り、  
古い市バスとプレハブを教室に、小さな  
運動場のほか、近くの林や小道なども保  
育の場として活用されている。幼児教育  
には素人の母親のなかから保母を選び、

たものが良いと思ったり、また逆に市民  
追従型の考えの方が多い。市民の役割と  
行政の役割をはっきりふまえた上で、柔  
軟性のある判断ができる人を育ててほし  
い。なぜなら行政も結果は人が作り上げ  
るものだから。そして市民と手をたずさ  
えて、横浜市をいや日本を作りあげてい  
きたいと思っています。

どの母親も交代で助手をつとめる。母親  
たちはわが子だけをみるのではなく、集団  
の中でどの子にも目を注いでいる。

"自分たちで幼児教育を"と集まった  
人たちも、その考え方はいろいろだ。朝  
のあいさつのさせ方から、どんな子に育  
てたいかまで、意見がくいちがうたびに  
何度も話し合いをくり返している。「そ  
れら乗り越えることによって信頼関係  
ができ、会が充実してきました」と会員  
の一人は話している。またケンカは相手  
を認める第一歩だ、ドロンゴ遊びは幼児  
期に欠かせないものだから、親が子供た  
ちの活動から教えられ、成長していった  
面も著しいという。

満二年たったこの三月には、子供の成  
長と共にこの会を「卒業」する親も何人  
かでてきている。「この会の活動で多く

編集部